栄養教諭養成に係わる「特別活動研究」の実践について

女子栄養大学短期大学部
こども食育学研究室　香川明夫

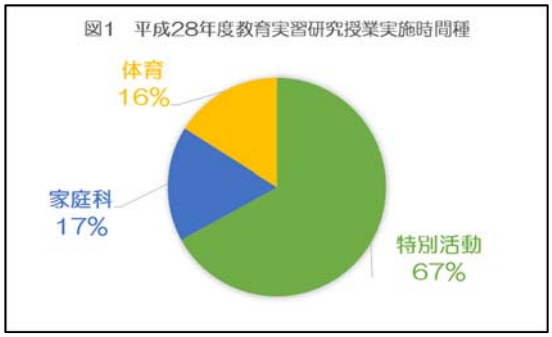
１　はじめに

食育ということばが学校教育に取り入れられるようになった今回の学習指導要領では、学校教育全体を通して取り組むことが求められている。各教科・領域についても「食育の観点」を取り入れた指導を行うことが明記されるようになった。[1]しかし、いわゆる各教科において設定される「目標」に食を通じて迫ることはあまり考えられていない。食の内容を直接的に扱う小学校家庭科や中学校技術家庭科においてはそのこと自体が学修であるが、国語や算数などはツールとして使うことになる。そういった点からも、日常の学校生活の中で食に関わる教育を行うことは学校給食の活用という面が大きくなる。栄養教諭養成において学校給食を生きた教材として食育を推進することがとても大切なこととなっている。その力をつけるための養成機関としての教育実践について述べる。

特別活動と教職課程における食育

学校給食を指導場面として位置づける根拠は例えば「小学校学習指導要領　特別活動第２　各活動・学校行事の目標及び内容〔学級活動〕２　内容〔共通事項〕(2)　日常の生活や学習への適応及び健康安全　キ食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成」がそれである。本学教職課程の科目にある「栄養教諭教育実習」において、各学校で研究授業の課題をさせていただいている中、図１に示すとおり、本学学生は「特別活動　学級指導６７％・家庭１７％・体育（保健領域）１６％」という時間をいただき授業を行っている。

学校現場では日常的に教育課程の中に「食育」という科目名がなく、横断的に取り上げることが可能だ。実際には給食を通してということ、１週間の教育実習という短期間のなかで単元全体に関わる計画、実行が難しいことなどから考えると、特別活動の中で行うことがより、通常の学校教育活動において取り組みやすい。



そこで、本学では特別活動を中心とした授業展開ができるように授業内容を編成した。

２　特別活動研究の学び

１）導入から授業計画

授業における学生の学びは、より現実的な授業実践に活かせるようにまず、「特別活動とは何か」について学習指導要領ならびに同解説（特別活動編）[2]を利用して、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事等の目標や取り組みについて概論としての特別活動への理解をもたせる指導を行った。

次に、学習指導案の作製技術を「教育実習指導」等の科目で身につけるとともに、「食に関する指導の手引き」[3]や文部科学省食育教材小学生用食育教材「たのしい食事つながる食育」[4]などを根拠として教材作製の意義、ねらい、工夫など授業構成に関わる技術などを総合的に活用して実践可能な授業として計画を立てている。

実際に 45 分間の授業を行うことを念頭に学習指導案を立案することは学生にとって難しい。対象学年を検討し、実態を想定し、その実態に応じた指導を検討する。さらに、年間指導計画によって、また食育の学校全体における計画に沿うことを含めると、実態が見えない学習者をイメージするところから先に進むことが困難である。

そこで、食に関する指導の手引きや食に関する実態調査、平成 28 年 2 月に文部科学省から発行された小学生用食育教材「たのしい食事つながる食育」等から今日的な課題を見出し、授業課題を設定している。

２）学習指導案の作成（教材研究）

学習指導案は基本となるフォーマットを提供し、それによって作成することと同時に、学習指導案については地域、学校等によって様々な形式があることを確認することが必要である。別に示す「授業用学習指導案項目」にある項目を記入することは学習指導案の作成における前提条件を授業者がしっかりと捉えるための内容として最低限の項目を取り入れている。「題材について」の中には「教材観」「児童観」「指導観」などに分けて記載されているものも多いが、そういった内容を作成中に指導しながら含めて書かせる様にした。

本時の展開については表頭の言葉に特に指導を行ってきた。すなわち左から「段階」「学習内容」「学習活動」「指導上の留意点・評価・資料」「時間」という言葉を入れ、特に、「学習内容」と「学習活動」の違いを明確にするように指導した。学習内容があってから学習活動が存在するということを意識づけるための指導であり、「食育は活動ありの内容なし」と言われることも多い。特別活動でも集団活動や生活についての「知識理解」の評価規準を取り入れることが行われている。[5]内容を明確に記すことで、本時のめあてから外れることなく、学習活動が展開できる。教育実習における研究授業では、児童の発言により、実習生が立ち止まってしまったり、本時のめあてから外れ

授業用学習指導案項目

表題

　第 学年 組 学級活動指導案

計画者氏名：

日時 平成 年 月 日（ ）第 校時

場所 年 組 教室

指導教諭

授業者 印

題材名 「　　」

題材について

栄養教諭として専門性を活かす場面設定について

指導計画（事前指導に何をする・授業の題材名・事後指導に何をする）

事前：授業：事後：

本時のねらい（目標）

（特別活動と食に関する目標それぞれ入れる 指導要領・手引きを参考に）

た方向に学習が進んでしまったりすることが授業観察でも多く見られてきた。その際の拠り所としても、「学習内容」と「学習活動」は分けて記入していくことが重要である。

３）教材作成

学習指導案が完成した際にはそれを実際に展開するための教材作りが必要である。広い意味での教材は、「その場」の環境も含めてであることは当然であるが、ここで述べる教材は製作または実物という視点で学生たちに指導した。これは特別活動に限ったことではないが、栄養士が栄養指導を行うときに、その活動において使うものを「媒体」ということが散見される。教育現場ではそぐわない言葉であり、めあてに向かって学ぶためのものということをしっかりと「教材」という言葉で表現し、作成においてもしっかりと教材に授業のめあてを織り込んだものを作成させたいと考えていた。

教材として、黒板に掲示するような平面的なものと、実際に手にとって学ぶ立体的なものとに二分される。

平面の教材としての代表、板書では、授業時間１時間分を１面の使用と考える。それは、授業の初めから終わりまでの学習が一

図２　模擬授業終了後板書

目でわかることが必要だからである。黒板は消して書くことができるが、そのような使い方をしていると、情報量が多く、学習全体を児童がとらえきれない。順序性も大切で段階を踏んで論理的思考の整理の場としての利用が望ましい。板書計画を立てることは授業全体を見渡すことにつながっている。図２及び３は特別活動研究の１部分で行った模擬授業１時間分の板書全体像である。

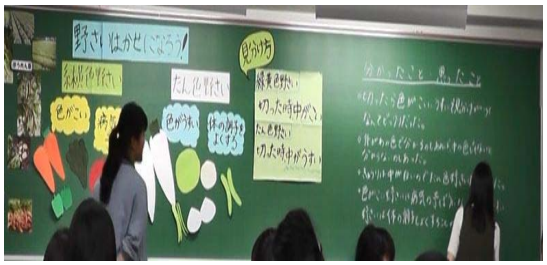


図３　模擬授業終了後板書２

立体的な教材としての代表は学校給食そのものである。栄養教諭の拠り所であり「給食を生きた教材とするところに他の教諭職との違いが鮮明になる。このため献立を立てる力が必要という指導は栄養教諭養成において欠かすことができない視点である。

４）模擬授業の実際

特別活動の理解、学習指導案の作成、教材の作成を経て、45 分間の模擬授業の実践が行う。短い時間の指導体験は、教育実習指導などの時間を利用して体験してきているが 45 分間というと、未知の時間である学生が多い。栄養教諭は元々担任教諭等とのティームティーチングで授業を担当することが原則である。しかし、年間指導計画や１時間の授業を構成する力をつけてこそ、担任等の教諭と同じステージで意見交換を行い、栄養教諭として教育に参画することができる。また、本学の授業評価では学生から「この授業が教育実習にとても役に立った」というコメントも複数得ている。授

業方法について、改善するための意見交換も行い、様々な角度から授業を見ている。授業の様子は録画し、授業者グループに配布する。

５）授業の振り返り

食育の評価については、総務省が[6]「栄養教諭の配置が進むことにより、学校において朝食摂取に係る指導が充実し、児童生徒の朝食欠食率の改善が期待されることから、(中略) 平成 19 年度と 25 年度の栄養教諭の配置率の伸びと小学 6 年生及び中学 3 年生の朝食欠食率の伸びとの分析を行ったところ、両者の相関は低かった。」述べており大変厳しい評価が出た。政策評価としての意見なのでそれがすべてではなく、同報告書では「学校全体で食育に取り組む体制づくりが進んだ」や「栄養教諭が学校における食育の中心的な役割を果たすようになった」「食に関する指導に対する教職員の理解が進んだ」などの肯定的な意見もある。いずれにしても、食育の適正な評価が必要であり、栄養教諭は各自の授業や結果に評価をすることができる力量が必要である。本学の学修においては、相互評価という手法を通して他を見る目、自己を見る目を育てる視点を提供している。

授業観察後、それぞれが自分の意見を授業者に提供すると同時に、同じ内容を自己の授業実践において確認することとしている。

主観的評価が中心となるが、図４、図５のような評価用紙を記入している。この用紙を回収し、授業者に回付することで自分の授業を第三者の視点で見直すことができると考えられる。繰り返し繰り返しそういった活動をすることにより、自己評価においても学習活動や授業を分析しようとする姿勢が身につき、ひいては授業力向上、教育力の向上へとつながると考えられる。最後に、筆者が授業に対するコメントを、板書や意見交換、教職経験者としての授業展開の例を見せまとめている。

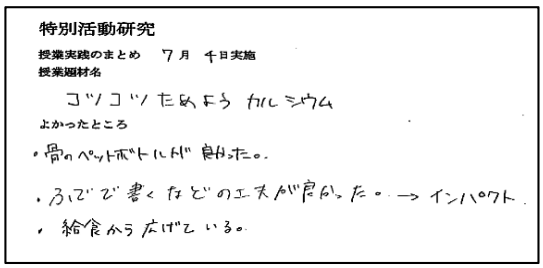

特別活動研究
授業実践のまとめ　7月　千日実施
授業題材名
コツコツためよう カルシウム
よかったところ
・骨のペットボトルが助かった。
・ろうで書くなどの工夫が良かった。→インパクト
・給食から広げている。

図４　授業の振り返り記入

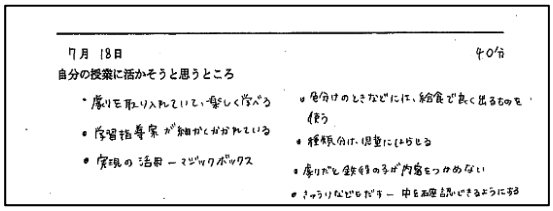

7月 18日　40分
自分の授業に活かそうと思うところ
・豆腐の切り方などには、給食で良く出るものを使う
・学習指導案が細かくかかれている
・実践の活用 ― マジックボックス
・低学年は児童にとらえる
・厚紙でも鉄板のるが内容をつかめない
・さっぱりなどもだり ― 中を画面訪ねできるようにする

図５　授業の振り返り記入２

３　おわりに

教職課程の集大成という意味合いがある「教育実習」には学生が強い不安と期待を持っている。それは、こども達と仲良くなれるのかということから始まり、授業が自分でできるかというところがピークになっている。

学習指導案を短期大学部 2 年生になったときから書き始め、教材研究をすすめると徐々に自信を持って、研究授業用のものが書ける。はじめは学習内容と学習活動の差について表現できない状態があっても授業用学習指導案項目に合わせて書くことができ、教材を作成することができるようになる。本来、大学の授業時間の中でその力を付けたいところではあるが実際にはそのほ

かの時間（授業時間以外）で個別に対応することが多い。
このような学修活動は今日的教育課題である ActiveLearning にも通ずるものがあると考えている。
　栄養士資格と教諭資格のダブルライセンス獲得のため、今後も改善を加えながら栄養教諭養成を行いたい。

引用・参考文献

1)　文部科学省: 小学校学習指導要領. p14, 東洋館出版社, (2008)
2)　文部科学省: 小学校学習指導要領解説　特別活動編. 東洋館出版社, (2008)
3)　文部科学省: 食に関する指導の手引－第 1 次改訂版－. (2010)
4)　文部科学省: 小学生用食育教材「たのしい食事つながる食育」. (2016)
5)　日本教育政策研究所教育課程研究センター: 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校特別活動）　23 (2011)
6)　総務省: 食育の推進に関する政策評価. p.45～p.47 (2015)